みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

野生と環境

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4378

序論　地球の野生動物と人類

池谷和信・林良博・奥野卓司

1　なぜ「関係性」なのか

動物学は、動物の個体および種の本性を構造的・機能的に研究する立場をとる。それゆえに、動物という生命現象を客観的に記述できる。だが、それだけでは、人間にとって動物が理解できたということにはならないだろう。人間が認識する動物は、なんらかの人間活動とのかかわりの中で生きている。だからこそ、人間はその動物を記述できる。

とすれば、動物を理解するためには、動物自身だけでなく、また人間の側からだけでなく、動物と人間との関係性を論じなければならないはずである。そしてそのことが、動物の一種でもある私たち人間自身の理解にもつながり、さらに、人間が他の動物とよりよい関係を構築することにつながっていく。

動物行動学という新たな学問領域を確立し、一九七九年にノーベル医学生理学賞を受賞した、ドイツのコンラート・ローレンツによる『人・イヌに会う』(ローレンツ 一九八一)は、この領域の先駆的な著書であると言っていいだろう。ローレンツは、イヌの祖先はアフリカに棲むイヌ科動物のジャッカルであるとし(今日では、ゲノム解析の進歩によって、このジャッカル起源説自体は否定された。イヌの本当の祖先は中央アジアに棲むアジアオオカミであることが実証されている)、ジャッカルの群れのリーダーの代わりに、当時の狩猟採集民のリーダーがそれに成り代わったと考えた。ジャッカルの群れは数十頭のオスから成る順位制を基本にしており、三〇人程度のバンド(核家族を基本単位とする流動的集団)がそのままそれに入れ替わることができたとする。

この著書の冒頭で、イヌ科動物とヒトが出会う感動的なシーンは、実際にあった動物と人間の新たな関係の最初の一頁を記述したものと言えるだろう。というのは、イヌは人間にとって最初の家畜であったからだ。それまで、人間

と動物の関係は、野生動物と人間という関係でしかありえなかった。その時代には、動物は人間の狩猟の対象としてか、あるいは逆に肉食動物が人間を餌食とするか、そしてたいていの場合はお互いにまったく関わらずにすみ分けるという三種の関係しかなかった。

ところが、イヌの祖先とヒトが出会うことによって、人間と動物の多様な関係が初めて生じた。新たに家畜という関係が生まれただけではない。これまでの獲物、食糧、狩猟、侵害、駆除といった「対立的関係」以外に、食糧、他の動物への防御・攻撃、使役(運搬、狩猟補助、牧畜、運動)、競争(闘牛、闘犬、闘鶏、競馬など)の関係、さらにそこから今日のイヌやネコのようなペット的関係が生まれ、愛玩、癒し(アニマル・セラピー)、メディア(関係づくりとコミュニケーション)、遊び、教育、補助(盲導、聴導、介助)、救助、捜査(警察犬、麻薬犬など)などの多様な関係が生まれた。

だが、それ以前にも動物は人間にとって、数々の神話にあらわれているように、崇拝(トーテム)、禁忌(タブー)などの宗教的シンボルとみなされていた。また、壁画や絵画、彫刻などの様々な表現の対象ともされた。さらに、「自然」「生命」の象徴、代替として、アニミズム的な関係を示す表象的関係としても存在した。その表象的関係が具体的な飼育と結びついて、餌付け・飼育、展示(見世物、動物園)となり、その後に医療や様々な自然科学分野での「実験」の材料のような支配的関係にまで多様化した。

文化人類学者ライオネル・フォックスによれば、ペットに対する飼い主の思いのような、動物に対する人間の一方的な愛情は、たとえそれがペットとしてであっても、むしろペットである場合にこそ、上記の支配的関係、つまり支配者としての飼い主(人間)と、被支配者としてのペットという基本的な差別構造を崩すものではないという(フォックス一九八六)。

このような見解の一方、動物行動学者のマイケル・W. フォックスが『イヌの心がわかる本』(フォックス一九八五)で提唱したように、ペットとしてではなく、「コンパニオン・アニマル(伴侶動物)」として接しようとする傾向も出てきた。日本でもこの意識はとくに動物愛護論者の間に強く、また一方で、イヌやネコを「家庭動物」と呼ぼうとする人たちもいる。しかしながら、その名称自体がきわめて日本的であることが象徴しているように、こうした関係が、

その飼い主が属する文化(この場合は日本文化)に強く影響されているということは否定できない。

また同様に、ワシントン条約の精神のように、野生動物を人間の保護の対象とする動物保護の志向が、国際的な流れになってきている。このような地球環境保全の世界的な流れを背景にして、人間と動物との「共生的関係」がめざされるようになってきた。このように野生、すみ分けという「非関係」か「対立的関係」から始まった人間と動物との関係は、家畜化を契機に今日まで多様に拡散している。

このような状況をふまえて、人間と動物の多様な関係性を、今一度あらゆる周辺科学の協力によるアプローチによって解明していくことが緊急の課題であろう。

2 人間と動物の関係学の構築

かねてより、人間と動物との関係はしばしば文化人類学(民族学)の一領域として研究されてきた。とくに日本の文化人類学の一部(生態人類学・民族生物学など)は、欧米の人文社会科学中心の文化人類学とは違い、霊長類学の今西錦司によって、サル(動物)とヒトとの関係の研究で始まったことが特色である。また、日本の生態人類学や民族生物学の研究者は、理系、特に動物学、農学領域からの出身者が多い。

ただ、動物学や獣医学など他の専門領域の学会にも同様の関心をもつ研究者が散在し、それぞれの専門領域で人間と動物の関係を調査研究していることもあり、これまでは研究の総合的な実態がつかみにくかった。そこで一九九五年に日本では、東京大学農学部の林良博(獣医学)の呼びかけで、理系、文系に散在しているこの分野の研究者だけでなく、動物愛護に関わる市民や動物園関係者らも参画して「ヒトと動物の関係学会」が設立された。これはすでにイギリスの研究者たちが創始者となり、現在はアメリカのシカゴに本部を置いて活動しているＩＡＨＡＩＯ(ヒトと動物の関係に関する国際会議)の影響を受けたものであり、「ヒトと動物の関係学会」は国際的にはその日本支部とされている。

さらに、二〇〇四年には、人間と生物の関係には、その人間が属する民族や文化が深くかかわっていることが認識

され、「生き物文化誌学会」が立ち上がった。この学会では、「生き物」という名称にあらわれているように、対象は動物だけでなく植物や微生物のほか、人間の物語として存在してきた生き物である「化け物」も含まれている。

また、この領域では、さらに以前から日本では進化生物学者の中村禎里が「動物観」という概念を提示して、日本人と動物との関係を研究し、そのもとに集まった動物園の関係者たちによって「動物観研究会」が地道に続けられてきた。ただし、中村の専門は理系の研究であったので、動物の本当の姿を知るためには、人間の側の観点が必要という思いからあくまで趣味的に行ったものでしかなかった。

一方、一般の動物愛護運動家たちにも、動物を愛護する上で、動物行動学や獣医学の知識の他に、文化的な背景を知る必要性も認識され、動物の医療に直接関わってきた獣医師たちの間にも、臨床の現場での体験から心理学や社会学を学ばなければいけないという機運が高まってきた。さらに環境保護や動物愛護の実際的な運動にかかわることなしに、ヒトと動物の関係学はありえないとする研究者も増えている。こうした流れの中で、日本獣医学会、日本獣医師会、日本動物看護師学会、日本動物病院福祉協会、日本動物愛護協会、日本動物福祉協会、日本動物愛護社会化推進協会なども、この分野の研究に関心をもち、この分野の研究を深めている研究者も多い。

しかしながら、このように徐々に学際的な連携が進んでいるとはいうものの、この分野の研究の総合的・全体的な実像はいまだ明確ではないという現状がある。この「ヒトと動物の関係学」のシリーズでは、今日におけるその主要な領域を網羅することによって、それらの研究成果を結びつけることがひとつの意義となるであろう。

3　この巻のねらい―人間・動物関係学の新たな試み

本巻は、上述してきたようなヒトと動物との多様な関係のなかで、ヒトと野生動物との関係に焦点をおくものである。二〇〇八年現在、地球上にはおよそ二〇〇万種の野生動物が生息している一方で、約六六億人のヒトが暮らしている。また、近年の途上国を中心とする人口増加率はすさまじく、開発などの影響を強く受けて絶滅に追い込まれて

いる動物も少なくない。本巻は、「これまで地球のなかでともに暮らしてきた野生動物と私たちはどのような関係を持ってきたのか?」「今後、どのように関係を持ったらよいのか?」という問題意識のもとで構成されている。

人間・動物関係の三つのタイプ

二〇〇八年六月に北海道の洞爺湖で開催されたG8サミットでは、将来の地球環境を守るために地球温暖化問題に焦点がおかれた。その一方で、二〇一〇年に名古屋市で生物多様性条約の第一〇回締約国会議が予定されているように、今後地球レベルでの生物多様性を維持することの重要性が注目されてきている。これからの私たちは、地球が限られた空間であることを強く意識して、人以外の動物とも共生していかなければならない。しかし現在、動物を含めた自然を保護する思想が地球全体に浸透しているにもかかわらず、地球上の稀少動物のなかには絶滅の危機に瀕しているものも少なくない。

また、私たちの暮らしは自然とかけ離れることで野生に対する感覚を失い、野生動物と人とのかかわりにあまり関心を抱かなくなっている。多くの人びとは、アフリカのサバンナでのライオンによる狩猟やヌー(ワイルドビースト)の群れの大移動のように、テレビの動物番組のなかで野生動物とのかかわりあいを持っている。あるいは、ホッキョクグマの行動展示などでよく知られる北海道の旭山動物園のように各地の動物園において世界の動物に出会い、動物にロマンティックな認識を持ったりしている。現代の日本では、サルやイノシシなどによる獣害(1章3節、2章1節)、在来種を絶滅させたり脅かすブラックバスやタイワンザルのような外来種の侵入による問題が報道されることも多いが、身近な問題として受け止めている人は多くないであろう。

たとえば、クジラの場合をみてみよう。現代の地球で暮らす約六六億の人びとは、クジラとどのような関係を持ってきたのであろうか。世界には、まずクジラ肉を食用にする文化としない文化とがある。私たちは、国際捕鯨委員会(IWC)での捕獲の是非をめぐる論議を聞くことはあっても、ホエールウオッチングのようなエコツーリズムの企画

に参加しない限り、クジラを見る機会はないであろう。戦後の日本では肉を食用にすることが最大の捕獲目的であり、クジラは水産資源の一つとしてみなされたが、近年では、食用としての需要は少なく骨を使った加工品が土産物として売られたりすることを除いて、野生動物として認識されることが多くなっている。このように地域や時代に応じてクジラ利用のあり方は変わってきているのだ。つまり、人間側の文化によって、動物と人とのかかわり方は様々な形がみられる。そこで、数百万年におよぶ私たち人類の歴史をふりかえって、初期のころから現在までの地球における野生動物と人とのかかわり方(文化)の歴史を筆者は次の三つの点から分類できると考えている(図1)。

まず、第一タイプとして、もっとも地球上に普遍的に広がっていた文化は、野生動物を自らの食糧の一つである肉とみなす考え方である(2章2節・3節・4節、3章4節)。一般によく知られている野生動物のほとんどは、地域住民にとってのタンパク質の供給源であることが多い。ゾウ、キリン、ダチョウ、ワニ、ゴリラ、野鶏、イノシシなど、名前を挙げたらきりがないであろう。ただし、カラハリ砂漠の狩猟採集民として知られるサン(ブッシュマン)は、キリンやダチョウを好物とするが、彼らがライオンの肉を食用にしたのを、私は見たことがなかった。しかし最近、なかにはその肉を食べる人がいることを知り驚いた。私も、思わずその肉を食べたのであるが、これまでの現地経験からライオンは食べられないという意識が強く、それを口に入れたもののはきだしてしまった。食文化では、個人の好みや文化的規制力という点を無視できないであろう。

第二タイプは、動物資源が商品になるタイプである。動物の肉がブッシュミートとして商品であるだけではなく、ある特定の野生動物種の毛皮(ラッコ、ビーバー、テンほか)や角(シカ、サイほか)や牙(セイウチ、ゾウほか)や胆(クマ)は高価で売却されてきた。アフリカでは、動物の肉は、都市にも大きな需要があるので森林や砂漠では狩猟が盛んになり(2

第1タイプ	自給品(肉、毛皮、角など)
第2タイプ	商品(肉、毛皮、角、牙、胆など)
第3タイプ	観光資源(クジラ、ライオン、キリン、ゾウなど)

図1　人と野生動物とのかかわり方の類型(出所：池谷作成)

章4節)、都市の市場にはサルやワニなどが並んでいる光景をよくみかける。そして農村では、動物を捕獲することで生計をたてる住民がいる一方で、外部からやってくる密猟者が絶えないでいる。一方でシロサイの角は、中国では広く漢方薬の原料として、イエメンでは短剣の柄に利用されている(Moulton *et al.* 1999)。その影響でシロサイの密猟が盛んで、その個体数は急激に減少している。象牙が、古い時代から取引されてきたことは、よく知られている。現在、世界レベルでの象牙の国外輸出に関しては、それに反対する東アフリカと賛成する南部アフリカで大きく見解が異なっており、統一見解をつくるのは困難である。また、ゴリラの腕は、コンゴ地方の呪術師には不可欠なものとして知られている。さらに、アマゾンのリスザル、インコ、マカウなどは、ペット動物としての需要もみられ、日本のペットショップで売られていることもある。

第三タイプは、観光資源としての野生動物の商品化である(1章3節)。このタイプは、日本のほかにアメリカ(ハワイ)、東アフリカ、南部アフリカ、インド、ネパールなどで共通にみられる。多くの観光客は、クジラ、ライオン、トラ、キリン、ゾウ、カバ、サイなどを間近で見るために自然保護区を訪れる。あるいは、北部タイを訪れる観光客は、人間に馴化したゾウに乗って森の中をトレッキングする。その一方で、現在においても野生動物は欧米人によるサファリハンティングの対象でもある点を明記しなくてはならない。自然保護区のなかに狩猟保護区と呼ばれるものがあるように、もともと植民地時代の欧米人やエリートたちが狩猟するために保護区がつくられた歴史が認められる。現在、アフリカ南部に位置するボツワナ、ナミビアや南アフリカでは、ゾウを対象にしたサファリハンティングのために多額の現金が地元に支払われている。同時に、獲得されたゾウ肉は現地の人びとのあいだで消費される。

以上のように、野生動物と地域文化に代表される人とのかかわり方は、地域や時代によって変わるものである。つまり、第一タイプは全時代に共通であり、第二・第三タイプは比較的新しい。これらをふまえることを通して、日本を含めた世界の各地域における野生動物と人との関係を把握していかなければならないであろう。

人間と野生動物とのかかわり方の研究は、自然科学および人文社会科学の数多くの分野がかかわってきているが、これまでかかわり方の全体像が提示されることはなかった。このため、研究全体の流れがつかみにくく、最先端の研究水準もみえない状況がある。ここでは、動物・人間関係の研究全体をつかむために、野生動物、人、社会という三つの要素に分けて考えてみることにする。まず、野生動物そのものを主な対象にする研究者は、人間活動は動物の生態を攪乱させる要因とみなす傾向にあるため、狩猟圧には関心があっても資源配分をめぐる人の社会関係までは興味を持つことは少ないかもしれない。これに対して、人を対象の中心にすえる研究者は、狩猟や漁撈のような人の生業などから動物利用や動物観をみることに関心があるが、動物のことを十分に理解していないかもしれない。さらに、社会を中心にすえる研究者は、動物保護政策やワシントン条約など、国や世界の視野から両者の関係を把握することはできるが、動物そのものに直接関与することは少ないであろう。つまり、三つの要素には三つの研究者集団がほぼ対応しており、それぞれの特徴を持つものの三つの要素を視野に入れて総合的に把握するという枠組みが欠けてきたようにみえる。

ここでは、三つの要素に強くかかわる分野の研究動向をまとめてみよう。第一の野生動物の側では、動物生態学、保全生態学、哺乳類学、獣医学、野生動物保護学、野生動物医学、生物地理学など、その全貌を把握することは無謀なことであるかもしれないが、これまで「日本の野生動物を対象の中心として」研究が蓄積されてきたといえる。たとえば、大型哺乳類の研究では、個々の研究者が個別の動物を対象にした生態研究を中心にすえて保護・管理の問題が論じられることが多い。日本の野生動物では、小型動物(本川編 二〇〇八)、中・大型動物(高槻ほか編 二〇〇八)、水生動物(加藤編 二〇〇八)という三つの対象に分けて、それぞれの成果が本としてまとめられた。海外での研究では、ロシアのオットセイ(和田ほか 一九九九)やトド(大泰司ほか 一九九九)、アフリカのチンパンジー(西田 二〇〇二ほか多数)やゴリラ(山極 二〇〇五)、モンゴルのモウコガゼルなど様々なものがあるが、ゾウやライオンを対象にした研究は国内では

あまり盛んではない(小原 二〇〇二)。むしろ国内の哺乳類の管理を考える際には、北米の哺乳類の管理方法が紹介されている(ギルバート 一九九二)。また、研究方法をみると、高槻による生態誌の方法は、シカの採食生態、個体数、食性などをふまえて、シカによる農林業被害やシカの保全方法などにも言及してシカの未来まで展望する(高槻 二〇〇六a)。アシカ・アザラシを対象にした自然史の方法は、動物学的特徴、進化、生態、米露および日本の猟業史、保護などに言及する(和田ほか 一九九九)。しかし、これらは動物への人間活動の影響を十分に考慮しているようにみえるが、体系的な方法を示しているわけではない。

その一方で、近年、新たな形をとっている日本の野生動物保護問題の全体像が提示された(羽山 二〇〇一)。このなかでは、おのおのの動物ごとに獣害に関する研究が蓄積されてきている(三浦 一九九九)。クマ(米田 一九九八)、シカ(高槻 二〇〇六b)、カモシカ(小野 二〇〇〇)、サル(井上 二〇〇二:室山 二〇〇三:伊沢ほか 二〇〇五)、イノシシ(江口 二〇〇七)などである。これらの問題を解決するためには、日本において適切なワイルドライフ・マネジメント(野生動物管理)をする必要があることが指摘される(三浦 二〇〇八)。

第二の人の側では、生態人類学、民族動物学、動物考古学、環境民俗学、環境倫理学、文化地理学、歴史学、美術史などの多彩な分野が関係してくるが、それぞれの分野間の交流が必ずしも十分ではないようにみえる。ここでは、「日本を中心として世界各地の文化の事例として」事実の蓄積は認められる点が特徴であるが、あまり理論化は進んでいない。まず、動物文化は、生業、社会、儀礼などの様々な側面から把握されてきたが、「動物と文明」(河合ほか編 一九九五)、「生態と民俗」(野本 二〇〇八)、「考古学と動物学」(西本ほか編 一九九九)、「日本人と獣」(千葉 一九九五)、「人間野生動物関係」(Knight 2006; Manfredo *et al.* eds. 2009)というように大きなくくりでまとめた研究はあまり多くない。むしろ、クジラ(秋道 一九九四ほか多数)、ウサギ(赤田 一九九七)、キツネ(吉野 一九八〇)、カメ(千田ほか編 二〇〇一)、アユ(秋道 一九九二)、昆虫(三橋編 一九九七:野中 二〇〇五)などのように動物と人とのかかわりを個別の動物ごとにまとめた本が多い。また、生態人類学や日本民俗学の視点からは伝統的生業や儀礼を対象にした研究の流れがある。日本やアイヌの狩猟(池谷ほか編 二〇〇五ほか多数)や漁撈(菅 二〇〇〇:安室 二〇〇五ほか多数)などが該当するであろう。なかでもアイヌの狩猟では、コグマ

を獲得した後にそれを育ててから殺すというイオマンテはよく知られている(天野ほか編 二〇〇六)。

第三の社会の側では、政治学、経済学、環境社会学などからの研究が知られている。政治学で動物の国際的な取引に関するワシントン条約(阪口 二〇〇六)、国際捕鯨委員会、国立公園や動物保護区などの制度に関する研究が挙げられる。経済学では、狩猟や漁業の経済学が密接に関与するが、なかでも経済史では、世界の歴史の中で動物の毛皮獲得生産が地域経済のなかで重要であった時代が注目されてきた(下山 二〇〇五：西村 二〇〇三ほか多数)。最後の社会学では、地域社会のなかで希少動物を再生する活動(菊地 二〇〇六)や、獣害の社会問題(丸山 二〇〇六)、日本におけるクジラの社会的意味(渡邊 二〇〇六)などが論議される。

以上のように、これまでの人間・動物関係学では、鳥(秋篠宮ほか編 二〇〇八)やヒグマ(天野ほか 二〇〇六)やイノシシ(高橋編 二〇〇一)などのように、対象動物を絞ることで自然・人文科学をまとめた試みはみられたが、三つの研究の流れを整理して、それらを地球的視野から統合するという試みはほとんどなされなかったといえよう。

これからの人間・動物関係学にかかわる枠組み

本書は、これら三者をつなぐために、次のような問題を提示した。およそ六六億人の人類がどのように野生動物との関係を維持してきたのか？　しかも、日本に限定することなく、地球環境という視野に広げた。こうすることで、動物側と人側と社会側に分かれていたこれまでの学問分野を再編できるのではないだろうかと考えた。

そこで、本書の構成では、ヒグマ(1章2節)やシカ(2章2節)など、野生動物ごとの人間との関係史を一部にとりながらも、①人類の歴史、②地球環境のなかでの多様な関係、③動物をめぐる政治経済社会という三つの章を主な軸に設定した。まず、野生動物の歴史は人類のそれよりはるかに長いわけであるので、人類が動物に与えたインパクトはいかがなものであったのかを示した。とくに現生の人類といわれるホモ・サピエンスは、およそ七～八万年前にアフリカ大陸を出て以来、世界中に拡散してきた。そのなかで、絶滅をした動物はどのくらい存在したのであろうか。

次に、地球環境のなかでの動物・人間関係の地域性を把握することに努めた。具体的には、日本のイノシシから始まり、日本やモンゴルなどの東アジアの有蹄類、極北のイヌイットの動物とのかかわりの世界、アフリカ中部で流通の盛んなブッシュミートのかかえる問題、さらにはアマゾンの新世界ザルの研究からみえる人とのかかわり方など、地球全体に広がるように地域的バランスへの配慮がなされている。最後は、各国の動物保護政策やワシントン条約など、国家政策や国際関係の視野から動物・人間関係を把握することである。

さて、これまで述べてきたように野生動物と地球環境とのかかわり方は、様々である。本巻では、極北から温帯、乾燥帯、熱帯に至るまで地球環境全体を対象にして、対象とする動物も哺乳類から鳥類に及ぶように配慮している。また、動物・人間関係にかかわる歴史と現状を把握しようとしている。これまでにも、ある毛皮の需要が急増したことで動物の捕獲が急激に盛んになり、挙げ句の果てにはその動物を絶滅させたりもする。ある動物は人類への危害を与える害獣として注目されている。また、人類の側から動物とのかかわり方の歴史をみると、ある法的規制により、ある日突然狩猟が密猟に変化したりもする(2章3節、3章2節)。

ここでは、私たち人類の歴史をふりかえり、地球的視野から動物と人とのかかわり方がいかに変化したのかを考えてみたい。私たち人類の直接の祖先であるホモ・サピエンスは、アフリカで誕生して、約七~八万年前にアフリカから外に出て以来、おそらく狩猟、採集、漁撈を生業基盤として世界中に拡大していった。その過程で、多くの野生動物に出会い、それらの行動や生態に影響を与えてきた。たとえば、南アメリカ大陸の大型のナマケモノのように、すでに人類と出会った初期の段階で絶滅した動物もいれば、ニュージーランドのモアのように、かなりあとになって島に移住してきたマオリ農民によって絶滅した鳥もいる。その一方で、アフリカでは人類が長い間に動物とのあいだで共生関係を築いてきたことによるのか、両者が共生するための知恵を持っているようにもみえる。

まず、第一段階として、すべての人類が狩猟採集民であった時代を想定できる。この時代は野生動物と共存した時代であると言われているが、人びとのオーバーキル(殺し過ぎ)により滅びた動物も知られており(1章1節)、当時のハンターの実像についてはまだまだ論議がみられる。彼らは、野生動物の力にあやかりたいと願い各地に岩絵を描いたと

もいわれている。

次に、第二段階として、農耕民が卓越していた時代である。人びとは農耕を始めた結果、収穫期直前の畑にイノシシなどの動物が訪れるようになり、農作物の被害を受けることになる。江戸時代の対馬や青森の八戸周辺では、農民がイノシシによる農作物被害に苦しんでいたので、幕府によるイノシシの撲滅も行われていた。この状況は、インドネシアやアフリカなどの農民のそれに共通するものであり、地球的視野から把握する必要があろう。

そして第三段階として、近代化・都市化が急激に進み、世界中で人類による野生動物に対する影響力を無視できなくなった時代である。その結果、世界各地で動物の絶滅が急速に進むことになるが、わが国では、明治時代におけるニホンオオカミのような動物が当てはまるであろう(Knight 2006)。

最後は、第四段階として、グローバル化した動物保護思想が支配する時代である。各国において、世界遺産のなかの自然遺産のような自然保護区の面積がますます増大していき(3章4節)、ワシントン条約などの国際的な制度が整備されることになる(3章2節)。現在の日本では、「絶滅危惧種の問題」と「獣害の問題」がもっともよく知られている。前者では、コウノトリやトキが国内の問題として(3章3節)、オランウータンやゴリラなどの霊長類の減少が海外のものとしてよく知られている(1章3節)。後者では、世界的にもっとも経済的な損害を与えているものはゾウであり、国内ではイノシシ、サルやシカが一般的である(2章1節、2章2節)。このほかにも、タイワンザルやアライグマのような外来種問題、調査捕鯨などクジラ捕獲の是非をめぐる動物保護にかかわる問題がよく知られている。

現在、地球上をみわたしても、動物を食肉として直接獲得する狩猟に従事する人は多くない。アフリカ中部のブッシュミートを対象とする商業的狩猟(2章4節)などとは対照的に、日本のような先進国では、野生動物の肉が都市民に供給されることもあまりない。最近では、国内のある地域で増えすぎたシカや猟師によって捕獲されたイノシシの肉が提供される程度である。その一方で、南部アフリカなどでは、村人が白人にゾウを狩猟させて収益を得ているようなサファリハンティングの場合もある。アマゾン熱帯林における開発で代表されるように(2章5節)、様々な人間活動が野生動物の生息環境を大きく変えてきた。現在、地球上で人間が近づいても逃げないような動物が生息する環

境はおそらく存在しないであろう。

このように、本巻では、地球環境全体の視野から野生動物と人とのかかわりの原点について考えてみる。それに答えるために、かかわり方の歴史的変遷を把握すること、かかわり方の地域的差異を把握することが不可欠である。そして、将来の野生動物と人との関係を把握する際に、いったいどのような視点が重要であるのかを考えてゆきたい。

4　この巻の構成―地球環境のなかでの人間・動物関係

上述したように、これまで人間・動物関係に関心のある学問分野は数多くあったが、各分野でばらばらに行われておりお互いにあまり交流がなかった(図2参照)。しかし本巻では、これまであまり交流がなかった学問分野の研究者を集め、対話を行うことで、新たな動物・人間関係像を描くことを目的としている。そこで、本巻では、動物の側から研究する生態学・生物地理学、動物・人間関係の歴史や文化から研究する考古学・歴史学・文化人類学、人間の社会の側から研究する社会学や政治学などの研究が束ねられている。そして各論稿では、自らの分野の狭い領域に閉じこもることなく、個々人が学際的に展開することから(図2の点線で示される)、人類と動物とのかかわり方の過去や現在、およびその問題点を把握している。同時に本巻は、人類と動物の様々な関係を把握することを目的とするが、人類史の視点に立ち地球全体の地域的多様性をふまえて、「環境・歴史」(1章)、「生態・文化」(2章)、現代のかかえる「政治・経済」(3章)という、「三つの章」から構成される。さ

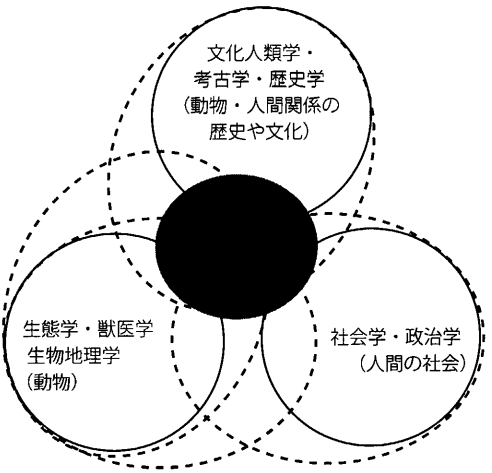


図2　人間・動物関係を把握する枠組み(出所：池谷作成)

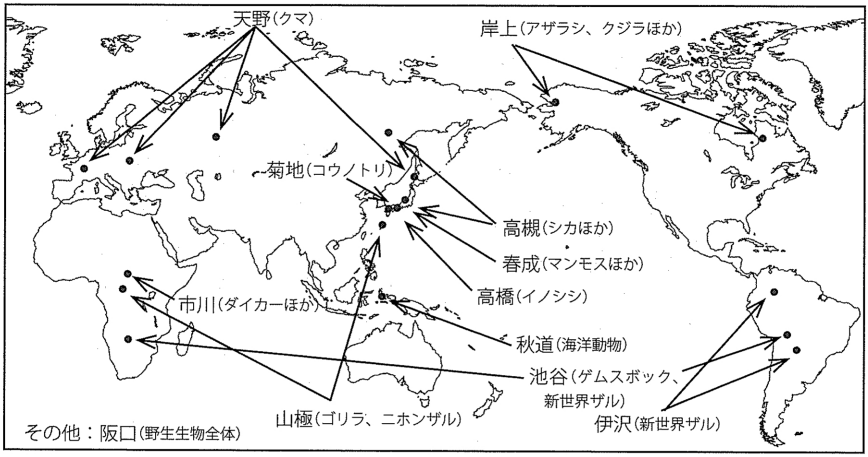


図3　本巻が対象とする地域

らに、各章の対象地域では、極北、冷温帯、熱帯など地球全体にくまなく広がっていることが理解されるであろう(図3)。

「環境・歴史」のパートは、次の三つの節から構成される。動物と人との関係の歴史は、先史時代、歴史時代、近現代という三つの時代に分けて考えることができるが、下記の1節や2節では先史時代を中心としている。また、対象とする動物はマンモス、クマ(ヒグマ)、霊長類(ゴリラ、新世界ザル)などの大型動物が対象とされている。

第1章第1節(春成)では、古環境学や考古学の最新の研究成果を元に、野生動物の絶滅にどのように人類がかかわってきたのかを浮き彫りにしている。たとえば日本列島の旧石器時代の動物(ナウマンゾウなど)は、どのような要因によって絶滅をしたのか、オーバーキル説と環境変動説との両方から検討している。また、ユーラシア大陸のマンモスの場合には、環境変動により絶滅したという考え方が強くなっている研究状況が示される。

第1章第2節(天野)では、ユーラシア大陸の東西に生息してきたヒグマに対して、東西に共通する人とヒグマとの様々な諸関係がどのように生まれて、どうして西ではヒグマが絶滅したのかが紹介される。そして、主に考古学の最新の研究成果を利用することから、ユーラシアの東西での人類とクマとの関係史の違いが明らかにされる。人類は、旧石器時代にはクマを狩猟しなかったが、新石器時代になるとクマは生業のみならず信仰の対象とされるようになる。

第1章第3節(山極)では、野生動物とヒトとのかかわりあいの現代史というテーマで、日本(ニホンザルほか)とアフリカ(マウンテンゴリラほか)を事例に、日本の霊長類学者が創造したフィールドワークの方法とその広がり方を通して、野生動物とヒトとのかかわり方が変わってきた状況やその背景を把握する。たとえば、人とサルとの日常での関係の変化が日本人の動物観を変えてきたこと、アフリカでは食肉のために人は動物に大きく依存していることが日本のそれと異なること、アフリカと日本での長年にわたる調査経験をふまえて、研究者による望ましい地域住民とのかかわり方にも言及している。

「生態・文化」のパートは、次の五つの節で構成される。ここでは、日本から始めて、東アジア、極北、アフリカ、南アメリカという具合に日本から離れた地域に展開する。対象とする動物も、イノシシやシカやダイカーのような有蹄類、アザラシやクジラのような海獣類、新世界ザルのように変わっていく。

第2章第1節(高橋)では、地理学の最新の研究成果を元に、わが国におけるイノシシと人類がどのようにかかわっているのか。イノシシはどのような生態をもつ動物であるのか、積雪などの自然要因や社会経済的要因によって分布域が拡大するイノシシの現況が詳細に述べられる。また、シシガキ(猪垣)にみられるように、長い歴史のなかでヒト・イノシシ関係にはどのような変化があり、現在の獣害(農作物被害)の実態とその位置づけはいかなるものであるのか、日本人とイノシシとの関係の歴史と現在をまとめている。

第2章第2節(高槻)では、動物生態学や動物保全学の最新の研究成果をもとに、東アジアのシカを中心とした有蹄類(ニホンジカ、モウコガゼルなど)と人類のかかわりを紹介する。シカの側からみると、人為のほとんど関与しないところで生息していた時期と地域はどのようになっているのであろうか。人口圧が高まり人為による景観が拡大していくなかで、シカはどのように対応してきたのか、現在の獣害はこれまでのシカ・ヒト関係の歴史のなかでどのように位置づけられるものであるのか、日本を中心として人類とシカなどの有蹄類との関係の過去と現在に焦点を当てている。

第2章第3節(岸上)では、文化人類学の視点を中心にして、北アメリカ極北地域の海獣類を中心とした動物が人類とどのようにかかわってきたのか、その現状と関係の変化、および変化に影響をおよぼしている背景について言及す

る。カナダとアラスカの先住民は、動物とのあいだにどのような経済的、社会的、宗教的関係を維持してきたのか。地域社会の外からのどのような政治経済状況が現地の人びとと動物との関係のあり方を変えたのか、極北における人類と動物との過去と現在に焦点を当ててまとめている。

第2章第4節(市川)では、生態人類学の視点を中心にし、アフリカ熱帯雨林における野生動物と人類とのかかわり方の過去と現在をブッシュミートに焦点をおくことから浮き彫りにしている。近年、国境を越える人やものの移動にともない、アフリカで獲得されたブッシュミートの流通がイギリスにまで拡大しているといわれる。また、狩猟を通しての野生動物の維持という視点から、その適正な狩猟のあり方を評価することはいかに困難であるのかが論議される。

第2章第5節(伊沢)では、地球のなかでもっとも自然が残されているといわれるアマゾン熱帯雨林を対象にして、そこでの三〇年以上におよぶ新世界ザルの調査研究の過程を丹念に記述することから、熱帯雨林のなかに「きれいな森」と「きたない森」とが存在し、それらにサルが適応してきたことを示している。同時に、このようなアマゾンでさえも、人が近づいてもサルは逃げないというような、本当の意味の野生はほとんど存在しないことが示される。今後、アマゾンの野生動物を守っていくには様々な困難があり、これまでの競争原理に基づく経済ではなくて、新たな価値観をつくりあげることが重要であると指摘される。

「政治・経済」のパートは、次の四つの節から構成される。動物と人とのかかわり方の問題を紹介するなかで動物保護に関する問題に焦点を当てる。

第3章第1節(秋道)では、生態人類学の研究成果を元に、海洋動物のグローバルコモンズという視点から海洋動物が人類にどのようにかかわってきたのかを浮き彫りにしている。クジラやマグロなどの海洋資源というのは国際政治のなかでもそのあり方をめぐる議論は盛んに行われているが、その一方で海洋資源への評価はヒトの地域文化に大きく左右されている。文化の違いを超えてどのような和解の方法があるのか、日本の近海を含めて海というコモンズのなかでの様々な資源管理の方法を通して、海洋の持続的利用と地域固有の利用との調和の難しさを指摘する。

第3章第2節(阪口)では、ワシントン条約や地球環境ガバナンスなど政治学、とくに国際制度論の最新の研究成果を元に、国際政治とのかかわりを無視できない現代のなかで野生動物と人類とのかかわり方の現在を把握する。ボン条約やラムサール条約などの生まれた背景やその運用の実態を中心に、国際政治のなかでの野生動物の関与する法律の変遷など、国際社会が野生動物の保全に関心をもちながらも、種の絶滅や個体数の減少を止められない理由について検討する。

第3章第3節(菊地)では、環境社会学の研究成果を元に、絶滅危惧種動物といわれるコウノトリの絶滅にどう人類がかかわってきたのか、現在の野生復帰と地域再生に関する最新の成果を報告している。絶滅危惧種動物の野生復帰がどうして必要であるのか、現実に本当の野生に戻すことはできるのだろうか。さらには、地域社会には、行政サイド、農家や非農家などの多様な地域住民が内在しているなかで、コウノトリと関与した地域再生のためにはどのような課題があるのかについて、コウノトリと人類との関係のあり方の過去と現在に焦点を当てている。

第3章第4節(池谷)では、近年の地球の土地利用の変化をみるなかで、世界の自然保護区の面積の拡大に注目している。これは、地球レベルで動物保護思想が浸透してきた結果であり、人間不在の自然保護区が拡大していることを示唆する。ここでは、保護区をめぐる世界的な傾向に言及するなかで、果たして保護区内で人は野生動物と共存できるのかという問いを提起して、アフリカのカラハリ砂漠とアマゾンの事例を中心にして、その難しさと可能性を述べる。

以上のように、本巻では野生動物と人との関係に焦点を当てて、「環境・歴史」、「生態・文化」、「政治・経済」という三つの視点を重視することで地球的視野で把握することに努めた。読者は、本巻を一読することで、動物・人間関係の把握には様々な分野が関与してきたが、一つの分野からのアプローチではその問題の本質にせまることが難しいことが理解されるであろう。野生動物の変化の視点と人類の文化の多様性とその変化をみる視点とを同時に持つことが求められているのである。編者らは、人類がどのように野生動物との関係を維持してきたのかというテーマのもとで、本書がその新たな試みのたたき台になることができればよいと願っている。

参考文献

赤田光男　一九九七『ウサギの日本文化史』世界思想社
秋篠宮文仁ほか編　二〇〇八『鳥学大全』東京大学出版会
秋道智彌　一九九二『アユと日本人』丸善
――――　一九九四『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会
天野哲也ほか編　二〇〇六『ヒグマ学入門―自然史・文化・現代社会』北海道大学出版会
池谷和信編　二〇〇三『地球環境問題の人類学―自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社
――――ほか編　二〇〇五『日本の狩猟採集文化―野生生物とともに生きる』世界思想社
伊沢紘生ほか　二〇〇五『サル対策完全マニュアル』どうぶつ社
井上雅央　二〇〇二『山の畑をサルから守る』農山漁村文化協会
今泉忠明　一九九五『絶滅野生動物の辞典』東京堂出版
江口裕輔　二〇〇七『イノシシから田畑を守る』農山漁村文化協会
大泰司紀之ほか　一九九九『トドの回遊生態と保全』東海大学出版会
小野勇一　二〇〇〇『ニホンカモシカのたどった道―野生動物との共生を探る』中央公論新社
小原秀雄　一九九六『人間は野生動物を守れるか』岩波書店
――――　二〇〇二『ゾウの歩んできた道』岩波ジュニア新書
加藤秀弘編　二〇〇八『日本の哺乳類学三　水生哺乳類』東京大学出版会
河合雅雄ほか編　一九九五『動物と文明』朝倉書店
菊地直樹　二〇〇六『蘇るコウノトリ―野生復帰から地域再生へ』東京大学出版会
鬼頭秀一　一九九六『自然保護を問いなおす―環境倫理とネットワーク』筑摩書房
ギルバート　一九九二(シュミット訳)『大型哺乳類の生態と管理・保護―北米大陸における現状と将来』文一総合出版
財団法人自然環境研究センター編　二〇〇八『日本の外来生物』平凡社
阪口功　二〇〇六『地球環境ガバナンスとレジームの発展プロセス』国際書院
下山晃　二〇〇五『毛皮と皮革の文明史―世界フロンティアと掠奪のシステム』ミネルヴァ書房
周達生　一九九五『民族動物学―アジアのフィールドから』東京大学出版会
菅豊　二〇〇〇『修験がつくる民俗史―鮭をめぐる儀礼と信仰』吉川弘文館
千田稔ほか編　二〇〇一『亀の古代学』東方出版
西村三郎　二〇〇三『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店
高槻成紀　二〇〇六a『シカの生態誌』東京大学出版会
――――　二〇〇六b『野生動物と共存できるか―保全生態学入門』岩波ジュニア新書
――――ほか編　二〇〇八『日本の哺乳類学二　中大型哺乳類・霊長類』東京大学出版会
高橋春成編　二〇〇一『イノシシと人間―共に生きる』古今書院
田名部雄一ほか　一九九五『野生動物学概論』朝倉書店
千葉徳爾　一九九五『オオカミはなぜ消えたか―日本人と獣の話』新人物往来社
ドロール、ロベール　一九九八『動物の歴史』みすず書房

西田利貞　二〇〇二『マハレのチンパンジー』京都大学学術出版会
西本豊弘ほか編　一九九九『考古学と動物学』同成社
野中健一　二〇〇五『民族昆虫学』東京大学出版会
野本寛一　二〇〇八『生態と民俗』講談社学術文庫
羽山伸一　二〇〇一『野生動物問題』地人書館
林良博ほか　二〇〇二『ヒトと動物』朔北社
フォックス、マイケル・W.　一九八五『イヌの心がわかる本』朝日新聞社
フォックス、ライオネル　一九八六(日高敏隆他訳)『帝王的動物』思索社
ブロック、クラットン　一九八九『図説・動物文化史辞典―人間と家畜の歴史』原書房
マクガヴァン、ジョージ　二〇〇五『絶滅危機動物図鑑―消えゆく野生動物たち』ランダムハウス講談社
松井健　一九八三『自然認識の人類学』どうぶつ社
丸山康司　二〇〇六『サルと人間の環境問題』昭和堂
三浦慎悟　一九九九『野生動物の生態と農林業被害―共存の論理を求めて』全国林業改良普及協会
――　二〇〇八『ワイルドライフ・マネジメント入門―野生動物とどう向きあうか』岩波書店
三橋淳編　一九九七『虫を食べる人びと』平凡社
室山泰之　二〇〇三『里のサルとつきあうには―野生動物の被害管理』京都大学学術出版会
本川雅治編　二〇〇八『日本の哺乳類学一　小型哺乳類』東京大学出版会
安室知　二〇〇五『水田漁撈の研究―稲作と漁撈の複合生業論』慶友社
山極寿一　二〇〇五『ゴリラ』東京大学出版会
湯本貴和ほか　二〇〇六『世界遺産をシカが喰う―シカと森の生態学』文一総合出版
吉野祐子　一九八〇『狐―陰陽五行と稲荷信仰』法政大学出版局
米田一彦　一九九八『生かして防ぐクマの害』農山漁村文化協会
ローレンツ、コンラート　一九八一(日高敏隆訳)『人・イヌに会う』思索社
鷲谷いづみほか　一九九六『保全生態学入門―遺伝子から景観まで』文一総合出版
和田一雄ほか　一九九九『鰭脚類―アシカ・アザラシの自然史』東京大学出版会
渡邊洋之　二〇〇六『捕鯨問題の歴史社会学―近現代日本におけるクジラと人間』東信堂
Knight, John 2006, *Waiting For Wolves In Japan: Anthropological Study of People-Wildlife Relations*, University of Hawai'i Press
Manfredo, Michael *et al.* eds. 2009, *Wildlife and Society: The Science of Human Dimensions*, Island Press
Moulton, M. P. / J. Sanderson 1999, *Wildlife Issues in a Changing World*, second edition, Lewis Publishers